

アジアの友

The Asia-no Tomo

6-7

JUNE-JULY

2014

アジア版フルブライト

香港の実業家、私財 1 億ドル (102 億円) を投じて
香港に『アジアの将来指導者育成奨学基金』創設



留学生が神輿を体験

6月7日(土)、荒川区東共栄町会の天王祭が開催されました。今年はあいにくの雨となり、まわりの町会が神輿を中止する中、東共栄町会は決行。ABKのやまぶき寮生、梁井寮生、卒業生、寮生の関係者、合計20名以上が参加しました。はっぴを来た学生達は雨でびしょ濡れになりながらも地域の方々と元気に楽しそうに神輿をかついでいました。幸い誰も風邪をひくことはなかったそうです。



アジアの友

2014年6-7月号 第509号

目 次

巻 頭

アジア版フルブライト

- 2 香港の実業家、私財1億ドル（102億円）を投じて
香港に『アジアの将来指導者育成奨学基金』創設

追 悼

- 14 丸谷金保 ワイン町長

中国人留学生インタビュー

- 20 私達が日本を選んだ理由と今
王姫さん 童宇超さん 劉雨辰さん

読者寄稿

- 28 山の巔、水の辺 ―雲南印象記― 呉 鶯 程希平

コラム

- 31 泰日工業大学 奮闘記（第6回）
「タイ人と仏教」 池田 隆

知友会通信

- 33 奨学金・イベント情報

MEMBERS

- 34 ご入会、ご寄付のご報告（2014年4月、5月）

<表紙> 奨学基金創設の発表会で挨拶をする曹其鏞さん
(2014.5.6 於、北京)

アジア版フルブライト

香港の実業家、私財1億ドル（102億円）を投じて
香港に『アジアの将来指導者育成奨学基金』創設

2014年9月からスタート

1960年代初頭、アジア文化会館（ABK）で日本を含むアジアの留学生との共同生活の中で深い友情を育んだ元香港留学生の曹其鏞（Ronald Chao KY、実業家、75歳）さんが、50年後に、悪化する中日関係を憂い、私財を投じ、中日の友人・知人に呼びかけて関係改善のための事業をスタートさせました。北京大学をはじめ中国の主要5大学（北京、清華、復旦、上海交通、浙江）に各2,000万元（約3.2億円）、計1億元（約16億円）を寄付し、中日の学生が交流し、共同生活をする『中日青年交流センター』をつくる



北京大学中日青年交流センター

構想で、北京大学は2012年に建物が完成し、中日の学生が共同生活をはじめ、現在は2期生が生活しています。他の4大学も2015年までに『中日青年交流センター』の完成を予定しています。また同様に将来の日中関係を担う人材だけでなくアジアを担う人材を育てるために、昨年、1億ドル（約102億円）を寄付して香港に「百賢教育基金会 ;Bai Xian Education Foundation」を創設し、この10月から「アジアの将来指導者育成奨学金プログラム」開始します。プログラムは香港に設立した「百賢アジア研究院 ; Bai Xian Asia Institute」が運営



左から麻生氏、曹氏、鎌田氏、田波氏、Schwartz氏



します。スタートの2014年は中日の留学生各50人（含、一部アジアからの留学生）、計100人に奨学金を支給する予定です。

これに先立ち、2014年5月6日（火）に、中国・北京市内の北京香港馬会会所で、招かれた中国、香港、日本からの関係者並びに報道関係者を200名以上集め、『アジアの将来指導者育成奨学金プログラム；the Asian Future Leaders Scholarship Program』の発表会とそれを運営する『百賢アジア研究院』の発会式が行われました。日本からは、早稲田大学鎌田薫総長、京都

大学小寺秀俊副学長、一橋大学一条和生国際企業戦略研究科長、九州大学柴田政之理事・事務局長が参加され、また財界からは『百賢アジア研究院』の諮問委員に就任される渡文明JXホールディングス（株）相談役、麻生泰麻生セメント（株）社長、田波耕治東京三菱UFJ顧問はじめ、各方面の関係者の方々がこの式典に参加されました。当協会からは布施知子理事が招かれ出席しました。

なお、この奨学金プログラムを取材した記事が新聞各紙、NHK等で報道されました。



◀ 2014/5/7 NHK ニュース（朝6時、朝7時；各2分）奨学金創設について紹介

▶ 2014/5/18 NHK 総合・海外ネットワーク ワールドトレンド「学生寮に託した日中友好の願い」北京大学学生寮・日中青年交流センターとアジア文化会館）http://www.nhk.or.jp/worldnet/archives/year/detail20140518_482.htm



◀ 2014/6/11 NHK BS1 国際報道 2014 日中の学生をつなぎたい
<http://www.nhk.or.jp/kokusaihouhou/lounge/140611.html>



▲ 2014/5/15 読売新聞（朝刊）解フルブライトの言葉



◀ 2014/5/8 日本経済新聞（朝刊）日中版フルブライト 両国の懸け橋を育成 香港実業家が奨学

朝日新聞
"DAILY NEWS"

日中に若き架け橋を 香港の実業家、留学奨学金1億ドル
東京・青森県 2014年5月8日(水)13時



日本に留学経験のある香港の実業家、曹其鏞(ツォウ・サウ・チョン)さん(75)が私財1億ドル(約100億円)を投じて、日中の学生を対象にした奨学金を設立した。留学を通じて相互理解を深め、未来の日中関係を開く人材を育成するが目的だ。曹さんは「日中の親を繋ぎ、難題に取り組みのリーダーを育てたい」と意気込んでいる。

曹さんは、約100億円を投じて設立した「曹其鏞教育基金会」を母体に、奨学金を出す。

この奨学金をもとに、日本の京大、早稲田大、二橋大の3大学が、中国からの留学生を募集する。一方、中国の北大、清大、香港科技大学の3大学は日本からの留学生を募る。日中で計年1000人の留学生を輩出、日中の架け橋となる見通しだ。

応募して選ばれた学生は、1人年間250万円を最長2年間支給してもらい、返還する必要はない。奨学生同士の交流を促するため、4週間の合同合宿も毎年行う。

曹さんは1979年に来日し、82年まで東大で機械工学を学んだ。曹さんは「ともに学び、一緒に学んだ仲間が生涯の友人。未来の日中関係、架け橋になりたい」と話している。(東京・青森県発)

▲2014/5/8 朝日新聞(電子版) 日中に若き架け橋を 香港の実業家、留学奨学金1億ドル

毎日新聞

目指せ「日中版フルブライト」 香港実業家が奨学金
私財100億円投入、日中関係担う人材育成
2014年5月6日(水) 日本経済新聞 電子版

【北京＝毎日新聞】日中関係が市況を打ちながら、日本での留学経験を持つ香港の実業家、曹其鏞(サウ・チン・ロン)氏が将来の日中関係を担う人材の育成に乗り出す。私財1億ドル(約100億円)を投じて、両国の学生を対象とする奨学金を創設した。曹氏は6日、北京市内で開いた記者会見で「奨学金が幅広い分野で指導者となれば、関係改善に向けた堅固な基盤となると述べた。

奨学金名は「将来のアジア指導者奨学金」で、今年秋までに早稲田大や京大など日中約10大学から学生約100人を選び支給する。曹氏は、東家で各界リーダーを輩出するフルブライト、ローレンス奨学金などを模範に「日中を中心に、アジア人によるアジアの未来のための奨学金にしていきたい」と強調した。



奨学金運営の諮問委員には、日本側から英文学のホーランド・アダムス教授、先住民族調査会長の森生孝典氏が名を連ねるなど、日中両界が互いに支援体制を敷く。曹氏は「企業としてモロバード(人財の供給源)が新たに生まれることを大いに歓迎したい」と語った。

奨学金の特徴は、毎年夏に奨学生全員がサマーキャンプに参加し、共同生活を通じて理解を深め合う仕組みにある。「共通の経験を通じて相互信頼があれば、歴史や文化や制度の違いも乗り越えられる」との曹氏の信念を反映したものだ。



この信念は、曹氏自身の日本での留学経験に由来する。日本とアジア各国の学生が共同生活を送る庶民派「アジア文化会館」(東京・文京)で共に過ごし、仲間になった曹氏の中で芽生えた年齢から来る焦りが、今回の奨学金創設へと繋がった。

「芥川さん(日中関係の現状を批判的ともいえる)。お話を聞いた曹氏の中で芽生えた年齢から来る焦りが、今回の奨学金創設へと繋がった。

▲2014/5/6 日本経済新聞(電子版) 目指せ「日中版フルブライト」 香港実業家が奨学金 私財102億円投入、日中関係担う人材育成

日中つなぐ留学生育てたい
私財102億円投じ奨学金設立
日本に留学経験のある香港の実業家、曹其鏞さん(75)が私財1億ドル(約100億円)を投じて、日中の学生を対象にした奨学金を設立した。留学を通じて相互理解を深め、未来の日中関係を築く人材を育成するが目的だ。曹さんは「日中の親を繋ぎ、難題に取り組みのリーダーを育てたい」と意気込んでいる。



曹さんは、約100億円を投じて設立した「曹其鏞教育基金会」を母体に、奨学金を出す。

この奨学金をもとに、日本の京大、早稲田大、一橋大の3大学が、中国からの留学生を募集する。一方、中国の北大、清大、香港科技大学の3大学は日本からの留学生を募る。日中で計年1000人の留学生を輩出、日中の架け橋となる見通しだ。

応募して選ばれた学生は、1人年間250万円を最長2年間支給してもらい、返還する必要はない。奨学生同士の交流を促するため、4週間の合同合宿も毎年行う。(北京・青森県発)

毎日新聞

中国語話題：(15) 香港実業家が日中学生に奨学金
2014年5月6日

香港の実業家、曹其鏞(ツォウ・サウ・チョン)氏(75)が、日中の関係を担う人材を育成しようと私財1億ドル(約100億円)を投じて「日中版のアジア指導者奨学金」を創設した。北京市内で6日に開いた記者会見では、日中、中国、香港の関係が親密になり日中が繁栄する、抱負を語った。

【北京＝毎日新聞】

曹氏は、両国で政治経済関係の企業を経営。親友、建設の巨頭から政治家にいたる、日中で東大に留学し日本人学生と同居し、共に交流を深めた経験から、中国の主要大学に両国学生を奨励する活動に力を入れた。今回、その思いが実現する。私財を拠出して奨学金基金を設立。日中双方の奨学生1000人を選定し、1人年間250万円を最長2年間支給する計画だ。

曹氏は、日中に約10大学の学生が対象。日本側には早稲田大、一橋大、京大、中国側には北大、清大、香港科技大学の3大学、各大学の推薦のコースに在籍する日中の学生を中心とした奨学生を選定する。奨学生には毎年夏に4週間のサマーキャンプへの参加が義務づけられ、両生同士の交流も促される。

曹氏には、日中の関係を担う英文学・1×1のフルブライト奨学金、森生孝典氏(中国側)・三浦孝典氏(日本側)の両方から奨学金を授けられ、日中関係の現状を批判的ともいえる。お話を聞いた曹氏の中で芽生えた年齢から来る焦りが、今回の奨学金創設へと繋がった。

▲2014/5/7 毎日新聞(電子版) 香港実業家が日中学生に奨学金

◀2014/5/8 朝日新聞(朝刊) 日中つなぐ留学生育てたい 私財102億円投じ奨学金設立

日中の大学留学支援＝アジア指導者奨学会－香港真実家

《日刊工業新聞》電子版

通信地址：浙江省宁波市鄞州区中河街道 315100 天童寺 88 号 佛学院 315100

『アリスの秘密花園物語』刊行後、1949年『新編 新選 新選 新選』刊行。

【東京特派】おちおちの食肉人村が韓国に大学に留学するのを阻止しようとする、普通の学生、農民村(国一舎へんに漢、ヨソド・ヤサシ)民70が、血闘1個(1000億円)を投じて、「日本のアジア戦争を中止せよ」と主張した。10月の政治対立で国民感情が激化する中、著者の初生経験・交流を記す、新入生アジアの未来を創るリーダーを育てる2人が中心。

青島は1900年義和團に東京大学に留学中、愛のアジア文化世界での生活を通じ、多くの日本や中国の友人を得たという。この時の経験から、日本の青年が互いに語り合ひ、互をよめるような環境を築きたいと、同国のある大学に学生寮の設備費などを寄付、これらの設備は現在までにすべてオープンする予定だ。(2016/06/07 483頁)

曹さんから、日本の大学も「青年交流センター」を、という呼び掛けに応じて、早稲田大学が一番乗り。中野国際コミュニティプラザの中に、「国際学生寮 WISH」をつくり、この4月から動き出した。

4月8日、「中野国際コミュニティプラザ」で開所式が行われ、国際学生寮 WISH の寮生約 50 名や大学関係が見守る中、鎌田総長および多大なご支援をいただいたご招待者（柳井正ファーストリテイリング会長、曹其鏞香港永新企業（香港）副会長と夫人曹羅碧珍さん、荻野正明フェニックスグループ会長、渡伸一郎コーンズ・アンド・カンパニー・リミテッド代表と地元の田中大輔中野区長）の手でテープカットが行われた。

◀ 2014/5/7 日刊工業新聞（電子版）日中の大学留学支援＝アジア指導者奨学金－香港実業家



▲ 2014/5/19 東京新聞（夕刊） 日中
共同寮 人材育て 香港実業家出資 中
国5大学で 留学生奨学金も「相互理解
深めて」



(早稲田大学 HP より：左から、渡氏、曹夫人、柳井氏、鎌田総長、曹氏、荻野氏、田中中野区長)

「アジアの将来指導者育成奨学金プログラム」について

このプログラムは当初は中日二国間で想定していたが、アジア太平洋域内の海外留学を望むアジアの若者たちの異文化理解と交流を促進し、広くアジアの将来を担う人材を育成することを目的として創設された。2014年度秋から開始される。奨学金支給事業は、毎年原則として学部生、大学院生で総計年100名、当面は日中で選ばれる。各大学の推薦に基づき百賢アジア研究院が選考する。一人年間250万円が支給され、支給期間は最長2年間。返済の必要はない。奨学金は、渡航費、授業料、生活費などをカバーする。アンカー大学としてすでに日中6大学が選定され実施協定を締結している。各大学での受入れ奨学生数は、京都大学15名、早稲田大学15名、一橋大学10名、北京大学20名、浙江大学15名、香港科学技術大学10名の計85名。他に、東京大学、九州大学等、他数校が協定締結を予定している。また、本奨学金の特徴は、毎年夏に奨学生全員が4週間のサマーキャンプの参加を義務付けられ、キャンプでの共同生活を通じ互いの理解を深め合う仕組みにある。また、奨学生として学位を取得した学生に対しては「Bai Xian Asian Fellow」の称号が付与される。

奨学金の支給は、香港に事務所を置く百賢教育基金会(Bai Xian Education Foundation:BXEF)が行い、選考、サマープログラムの運営等は、百賢アジア研究院(Bai Xian Asia Institute:BXAI)が行う。

なお、秋のプログラムの開始までに、日本側ではこのプログラムを支援する民間の支援団体の設立に向け準備中。

百賢アジア研究院 (Bai Xian Asia Institute Limited:BXAI) について

百賢アジア研究院は「アジアの将来指導者育成奨学金プログラム」の運営団体で、奨学生の選考、サマープログラム等を実施する。

役員は次の通り

(Honorary Chairman 名誉会長)

Mr. Ronald K.Y. Chao Vice Chairman and Director, Novel Enterprises Ltd.

(Advisory Council 諮問委員会)

1. 麻生泰 麻生セメント株式会社代表取締役社長、九州経済連合会会長
2. Mr. Silas K. F. CHOU President and CEO, Novel Holdings Group
3. 北山禎介 株式会社三井住友銀行取締役会長
4. 松下正幸 パナソニック株式会社代表取締役副会長
5. Mr. Mark SCHWARTZ Vice Chairman, The Goldman Sachs Group Inc. and Chairman, Goldman Sachs Asia Pacific

6. Mr. SHI Guangsheng Former Minister of Foreign Trade and Economic Cooperation of the PRC and Honorary Chairman, China Association of Enterprises with Foreign Investment
7. 田波耕治 株式会社三菱東京UFJ銀行顧問
8. Mr. TUNG Chee Hwa, GBM Vice Chairman of the Twelfth National Committee of the Chinese People's Political Consultative Conference
9. 渡文明 JXホールディングス株式会社特別顧問
10. Mr. XIANG Huaicheng Director, China Development Institute and Former Minister of Finance of China
11. Mr. XU Kuangdi Vice Chairman of the Tenth National Committee of the Chinese People's Political Consultative Conference (CPPCC), Honorary Chairman of the Governing Board of Chinese Academy of Engineering

(Board of Governors 理事会)

1. Professor WOO Chai-Wei, GBS,CBE Chevalier de la Legion d'Honneur
(President of Bai Xian Asia Institute)
2. Ms. Ronna W. T. CHAO Managing Director, Novel Investments Limited
(Chief Executive Officer of Bai Xian Asia Institute)
3. Mr. CHAO Kee Tung Managing Director, Novel Investment Holdings Ltd.
4. Mr. Charles Y. K. LEE, GBM, JP Co-Founder and Consultant, Woo Kwan Lee & Lo
5. Professor John C. Y. LEONG, SBS, OBE, JP Chairman, Hong Kong Hospital Authority, President Emeritus, Open University of Hong Kong and Professor Emeritus, University of Hong Kong
6. Mr. MA Yung Kit Chairman, Lee Heng Diamond Company Ltd.
7. Mr. David T. Y. MONG Vice Chairman, Shun Hing Group, Chairman, Shun Hing Education and Charity Fund
8. 萩野正明 フェニックスグループ・ホールディング会長
9. 渡伸一郎 コーンズ・アンド・カンパニー・リミテッド代表取締役会長
10. Professor ZHANG Junsheng Chairman, Development Committee of Zhejiang University and specially invited Inspection Advisor, Ministry of Education of People's Republic of China

Mr. Ronald Chao 挨拶

ご来賓並びに友人の皆様

本日は、百賢アジア研究院の『将来のアジア指導者育成奨学金：Asia Future Leaders Scholarship』プログラムの発会式に、お越しいただき誠にありがとうございます。先ほどの皆様のお言葉、また事業の説明は皆様を勇気付けるものであり、また新しい将来を作るべくこの度の事業を始めるにあたりまして、皆様が共に参加されることを願っております。

さて、まずなぜ我々がこのような広報に努めているか少しご説明いたします。私はかねてより控えめに振る舞い、結果をお見せすることで事業の価値を見てもらうとの立場でしたが、今回は、我々の目的からして世界に我々の任務と百賢奨学金の存在を知っていただき、最良の学生と大学が参加するよう訴える必要があると感じたからです。私は同時に幅広い方々よりのご支援を得てこそ、このプロジェクトが成立し得るものだと考えています。私はこのプロジェ



クトを立ち上げる機会を得ましたことを大変栄光に思っていますが、このプロジェクトは、我々の子孫のためによりよい未来を築こうと関心を持っておられるすべての人にとってのプロジェクトです。

すでに多くの方がご存知かと思いますが、私は大学は東京大学で過ごしました。そして、私は幸いにも1960年に新築の寮、『アジア文化会館』に最初に入ったグループの一人でした。この寮で多くの日本、また外国の学生と一生を通じる友人をつくることができました。

2010年になりますが、ちょうど70歳になった年に、私は中国の主要な5大学に『アジア青年交流センター』の旗印の元に寮を建設することを思い立ちました。『アジア文化会館』に模して、これらのセンターの、一つの屋根の下で、外国と地元の学生が共に住み、共に学ぶというものです。私の経験からして、これらの学生が末永い将来において堅固な永遠の友情を育む礎石にな



左から渡氏、曹氏、麻生氏



「北京の発表会会場に展示されたこの度の事業の起点から今日までの事業展開のパネル。1957年の日本留学からはじまり、1960年のアジア文化会（ABK）館竣工と同時にABKの第1期生となり、ここでの生活、体験、更に、寮生、職員、大学の教員等とともに行った3週間の北海道旅行の経験がこの度の事業のヒントとなっている由。パネルには、その当時のアジア文化会館の写真、北海道旅行の写真も展示され、また、当財団創設者、穂積五一初代理事長揮毫の『アジアの友』の文字が目を引きいていた。」

ると確信しています。

私は親しい友人を介して主要な日本の大学に同様の考えを伝えましたところ、私共と同様に熱の入った賛同が得られたことは大変嬉しい驚きでした。そして今、我々の日本の提携大学が同様の施設が完成済みか、あるいは建設中であることをここにご報告できることは大変嬉しいことです。

以上の中国および日本の大学の指導層と議論を進める中で、我々はトップ層の学生を引き付けることの重要性を強く認識するようになりました。多くのアジアの学生にとり、米国と欧州が好まれる留学先になっています。当然ながら、このような傾向を変えることは容易ではありませんが、大学と民間が共に力を合わせることによって、

はじめて、これを変えることができるとの結論に到達しました。

この結論により、即刻、百賢教育基金および百賢アジア研究院を香港に立ち上げ、『将来のアジア指導者育成奨学金』プログラムを実施することにしました。我々の提携拠点校、また今後の重要ないくつかの参加校と共に、これから毎年少なくとも100名に上るアジアの中核青年を育成できると確信しています。これらの中核的な学生の間で、よりよき相互理解と強固な友情が生まれることは、この

地域のみならず世界全体の利益に資すると思います。時が経つにつれて、百賢同窓生はさまざまな分野で指導者となるでしょう。彼らの共通の経験は、関係改善にとって堅固な基礎となるでしょう。

今始めたばかりです。前途には挑戦も待ち受けているでしょう。しかしながら、皆様のご指導、ご参加、またご支援を得て、我々は文化、国境を越えて橋梁を築くことができると楽観しています。これにより、アジアのみならず世界の安定と繁栄に確実に貢献するものと思います。

ありがとうございました。

（曹其鏞：百賢教育基金創設、百賢アジア研究院名誉会長、Novel Enterprises Ltd. 副会長）

Speech by Mr. Ronald Chao

Honorary Chairman of Bai Xian Asia Institute

Dear Honored Guests and Friends,

Thank you so much for coming to the launching of Bai Xian's "Asia Future leaders Scholarship Program". I hope you are encouraged by the speakers and our presentation just now, and that you will join us as we embark on this undertaking to make a difference in our future.

Let me spend a little time to explain why we are making such an effort to raise publicity at this time. I have always been an advocate for staying low profiled and letting the results show the value of our endeavors. However, this time, our objective clearly requires us to make the world aware of our mission and the existence of this Bai Xian scholarship so that the best students and universities can be attracted to join our program.

I also believe that this project will only be viable if we can get sufficient support from the general public and beyond. I am privileged to have the opportunity to initiate it. But this project belongs to everyone who is interested to make the future better for our descendants. This project is for all of us

Many of you may know that I spent my undergraduate years at the University of Tokyo. In 1960, I was very fortunate to be among the first residents of the newly built dormitory called "Asia Bunka Kaikan". In this dormitory, I was able to become life-long friends with many Japanese and foreign students.

Back in 2010, when I had just turned 70, I took the plunge to build dormitories under the banner of "Asian Youth Center" at five key Chinese universities. In these centers, modeled after Asia Bunka Kaikan, foreign and local students will live and study together under one roof. Through my own experience, I am convinced that this is a good platform for them to build a solid and lasting relationship in their formative years.

I promoted the same idea through my close friends to several important Japanese institutions. I was pleasantly surprised that they were equally enthusiastic and supportive, and am happy to report that all our partner universities in Japan now have or are building similar facilities.

In the course of our discussions with the leadership of these Chinese and Japanese institutions, we were made keenly aware of the importance of attracting top tier students. The United States and Europe are the preferred destinations for most Asian students going abroad. Obviously, it is not easy to work against this trend. We concluded that only through concerted efforts between the universities and the private sector could we hope to make a difference.

That conclusion sparked my decision to set up the Bai Xian Education Foundation and the Bai Xian Asia Institute in Hong Kong to implement our "Asian Future Leaders" scholarship program. Together with our anchor partners and several other important present and future participant universities, I am confident that we will succeed in nurturing a minimum of 100 elite Asian youths every year. Better understanding and solid friendship among these elite students will not only benefit this region, but also the rest of the world. In time, many of our Bai Xian alumni will become leaders in different fields. Their common experiences will be the solid foundation for improving relations.

This is just the beginning and the road ahead will not be without challenges. Nonetheless, we are optimistic that with your guidance, participation and continual support, we will build bridges across cultures and national boundaries. This will certainly contribute to the stability and prosperity in Asia and thus, the world.

Thank you!

Professor Woo Chia-Wei によるスピーチ

皆様こんにちは、

このようにたくさんの重要な方々が一同に集い、百賢教育基金の創設をお祝いし、百賢アジア研究院の役割、展望を共有することは、大きな喜びです。また百賢アジア研究院についての一連のご説明をお聞きでき、大変光栄に思います。

今日の世界の状況を見るに、懸念を抱かざるを得ません。グローバル化は人類に人々の経済を底上げする機会をもたらしましたが、同時に前例のないリスクと挫折も与えました。グローバル化は往来が疎遠な国家間に交流、協力の条件を作りましたが、同時に異なる民族間の文化、宗教、体制上の違いによる衝突、紛争ももたらしました。主要な要因は最新の科学技術の一方的進歩です。指で軽く押すだけで、情報は世界各地、更には宇宙に届きます。残念ながら、伝わったものは事実、真相、知識のみならず、デマ、嘘、誤解も含みます。人類の能力は、科学技術の進展についていけず、情報の内容を識別できず、また強力な手段を我々の役に立つように使いこなせていません。

ではどうすればいいでしょう。

人を基にするという原則に立ち返ることに尽きます。つまり、人と人の間の相互作用、信頼を有効に作ることです。アジアは素晴らしい出発点になると思います。

我々アジア人が『アジア』という名前



を発明したわけではありません。昔の欧州人が東に向かって、限りなく広がり聳える山々、砂漠や盆地、見分けが付かない多くの国々を見たとき、総体として『アジア』と呼びました。歴史的経緯はともかく、現在少なくとも、人種、文化、宗教、政治がそれぞれ異なる中央アジア、南アジア、東南アジア、東アジアの4地域のアジアがあります。

学術的観点から見れば、大所高所に立って、すべてのアジアに目を向ける必要がありますが、何かを始めるときはまずは足がつく身近なところで、小さいところから始めることしかできません。つまり、東アジアから出発するとまずは、中国、日本、韓国、次にシンガポール、ベトナム、これらの多少なりとも文化、宗教が同じで、儒教思想を基本とする国家です。百賢アジア研究院の目的は、これらの国々の大学生を出来るだけ多く集め、彼らの必要とする資金、時間を与えることにより、共に学び、共に生

活し、課題研究を一緒に行い、レジャーを一緒に楽しみ、実際の経験に基づいて、切磋琢磨して思索し、討論に勤しみ、相互の考え方、論理、観点を理解することにあります。

曹其鏞先生は次のように述べています。「我々ができることは、知恵、能力、気概を有する優秀な青年の中に種を蒔き彼らに条件と環境を提供し、彼らの長期の友誼が

作れるよう支援し、何時の日か、彼らが各地で指導的役割を果たし、各国人民間の平和共存、友好協力が推進されることです。」

百賢アジア研究院の同僚の方々、これから一緒になり、目標に向かって貢献できるよう努めましょう。

ありがとうございました。

(呉家瑋：百賢アジア研究院院長、香港科学技術大学名誉総長)

Speech by Professor Woo Chia-Wei

President of Bai Xian Asia Institute

Colleagues and friends, Good afternoon!

It is a great pleasure to see so many important guests gathered here to help celebrate the inauguration of the Bai Xian Education Foundation, and to show support for the launching of the Bai Xian Asia Institute. It's an honor for me to say a few words about what we have in mind for the Institute.

As we look at what is happening around the world today, it's hard not to show concern. Globalization has brought us opportunities to improve our living conditions, but has also brought us unprecedented risks and problems. It has created efficient tools for exchange and cooperation between countries which were once far apart, but has also given rise to cultural, religious and institutional conflicts and disputes. The reason behind all this has to do with the spectacular advances in science and technology. With the lightest touch of a finger on the keyboard, information can be transmitted to all corners of the world, and indeed to outer space. Unfortunately, what's transmitted goes far beyond facts and knowledge to include groundless rumors and misinformation. Our cognitive capability has not kept pace with scientific advances. We have not learned to differentiate truths from illusions; nor have we learned to put powerful technological tools to better use.

How can we deal with such a situation?

We Asians did not invent the word "Asia". I suppose when Europeans in ancient times looked eastward, they saw an endless expanse of mountains, peaks, deserts and basins, making it impossible to differentiate one nation from another. So they employed one word "Asia" to cover all. Putting history aside, in present times we see at least four different "Asias": Middle Asia, South Asia, Southeast Asia and East Asia, all of which differ greatly in terms of ethnicity, culture, religion, and politics.

Academic speaking, an "Asia Institute" should stand high and look far at all of Asia. But, at this

founding stage, we need to stand on solid ground and start small. In other words, we begin with East Asia and focus on China, Japan and Korea, followed by Singapore and Vietnam-countries which more or less share common roots in language and Confucianism. The Bai Xian Asia Institute would like to provide university students from these countries the opportunity and means to gather together—to learn, live, conduct research on relevant topics and enjoy healthy recreation as a group, and thus to explore, discuss and appreciate one another's thoughts reasoning and viewpoints through real-life experience.

As Mr. Ronald Chao says, the only thing we can do is to plant seeds of goodwill among these intelligent, capable and idealistic young elites, and to create an environment in which lasting friendship can be developed and nurtured. As some of them become leaders in their own countries, they would then be in a favorable position to help promote peaceful coexistence and friendly partnerships between the nations and peoples of Asia.

We in the Bai Xian Asia Institute promise to work together to make contributions towards this noble goal.

Thank you!

曹其鏞さんの中日関係改善に向けた事業の足跡

2010/10/25	構想を友人関係者に通知	中日両国の正常化と善隣友好を積極的に促進させるため、「中日青年交流センター」の建設を中国中核5大学の構内につくる構想を打ち出し、2000万円を各大学に寄付すること、2010年にまず精華大と寄付契約を結び、北京大、復旦大、上海交通大学、浙江大と協議中の旨
2011/10/14-15	中国・復旦大学	「中日青年交流センター」第1回5大学合同フォーラム開催 -中日青年交流センタープロジェクトについて討論 (参加)中国:復旦大学、北京大学、清華大学、上海交通大学、浙江大學、他関係者 日本:東京大学、早稲田大学、他曹氏事業賛同者(当財団より小木管理理事長、工藤常務理事出席)
2011/10/15-21	杭州・寧波	上記関係者の研修・親睦旅行
2012年9月初旬	北京大学	北京大学構内に「中日青年交流センター」完成。第1期生として中日各20名計、40名入寮
2012/10/26-27	中国・浙江大學	「中日青年交流センター」第2回5大学合同フォーラム開催 -連絡会議年次総会 (参加)中国:5大学他関係者 日本:東京大学、京都大学、早稲田大学、日中青年交流事業支援協議会(仮)メンバー他(当財団より小木管理理事長出席)
2013年9月初旬	北京大学	北京大学「中日青年友好センター」に第2期生入寮。中日各30名、計60名
2013/10/14-15	中国・北京大学	「日中青年交流センター」第3回5校年次総会開催 2012年9月開所した北京大学・「中日青年交流センター」の見学 (参加)中国:前述5大学及び関係者 日本:東京大学、京都大学、早稲田大学、九州大学、日中青年交流事業支援協議会(仮)メンバー他(当財団より小木管理理事長出席)
2013年11月8日	香港	将来を担うアジアの青年、特に中日の青年の相互理解と交流を促進するため奨学金事業を構想し、曹氏が1億ドル(約102億)円の私財を投じ、「百賢教育基金」創設
2014/5/6	中国・北京	「アジアの将来指導者育成奨学金プログラム」の発表会とその実施団体・「百賢アジア研究院」の発会式開催 中国、香港、日本から関係者約200名が参加(当財団より布施理事出席)
2014年9月より開始	中国/日本	「アジアの将来指導者育成奨学金」支給開始予定

追悼

丸谷金保 ワイン町長

当財団と関わりの深い元北海道池田町町長で、元参議院議員の丸谷金保さんが、2014年6月3日に逝去された。享年94歳。

大正8年(1919年)北海道池田町に生まれる。明治大学卒。昭和32年(1957年)、37歳で池田町町長に初当選し、昭和51年(1976年)に退任するまで5期20年間務める。その後、昭和52年(1977年)から2期12年間社会党・参議院議員として活躍する。町長時代は、震災(十勝沖地震)や冷害などで財政破綻していた池田町の財政再建を行い、様々な先進的事業に取り組み現在の池田町の礎を築いた。池田町の新しい産業として町内に自生していた山ぶどうをヒントにブドウ栽培を構想し、職員、町民を本場の技術習得のため欧州に派遣し、町営のワイン事業へと発展させ、昭和38年(1963年)、全国初の自治体ワイン「十勝ワイン」を誕生させる。その後の全国の一村一品運動の源流となった。また、首都圏でのワイン販売のため第3セクターの会社を東京につくり、十勝ワインと牛肉のレストランを開設し話題となる。同時に全国各地にワイン友の会を立ち上げ積極的な事業を展開した。『ワイン町長奮戦記』(1972年 読売新聞社)に詳しい。

この『ワイン町長奮戦記』の序文を当財団創設者、穂積五一初代理事長が書いており、丸谷さんの人となりにも触れることができるので、ここにご紹介し、ご冥福をお祈りして、故人を偲ぶよすがとしたい。



また、丸谷さんは学生時代当財団の運営するアジア文化会館(ABK)の母体となった新星学寮(前身は至軒寮)に入寮し、穂積と生活を共にしている。その頃の事を丸谷さんが綴った一文が『アジア文化会館と穂積五一』(穂積五一先生追悼記念出版委員会編著、影書房刊)に掲載されている。これは、丸谷さんが、穂積を追慕して書かれたもので、当財団設立者の穂積をより深く理解する一助となる文章である。ここに穂積の序文と共に掲載したい。

丸谷さんと池田町

穂積五一

「池田町のことは、いつまでも忘れることはできない。ここで、私たちは、誠実で謙虚な人々の思ひやりにふれた。質素で勤勉な生活を、まのあたり見た。生活や農業についての工夫と創意のいくつかの教訓を学んだ。みな感銘の深いもので、日本留学中かつて得られなかったものであった。私たちは、日本民族が生きてゆく源泉は都会にはなく農村にあることを、ここで知った」

これは、帰国した留学生からの便りの一節である。東大アジア学生友好会——丸谷町長がかつて住んでいた新星学寮の寮生が主宰している——が、隔年の夏に行っていた「アジア・アフリカ留学生北海道見学旅行」の一行50人が池田町の農家に分宿させてもらったときの感懐である。

たった一晚の交流で、こんなに留学生たちを感動せしめた池田町とはどんな町であらうか。池田町のことは、これまでも、たびたびテレビや雑誌にとりあげられてきた。

私もそこで造られた十勝ワインを知友にわかし、それが世に出るまでの苦心や、自慢できる町政のあれこれを語り伝えていたが、かねがね、その全貌をまとめて刊行したらと思っていた。こんど、丸谷町長の手によって、町のことが一冊の本になった。創意と工夫に富んだ町づくり



(1971. 8刊)

の興味深い記録が盛られているこの本は、きっと多くの人々に読まれるに違いないと思っている。

丸谷町長とは、学生時代生活を共にし、その後30数年に及ぶ極めて親しい間柄である。おだやかななかに実にしっかりした芯があり、正しいことを正しいとし、かうと決めたことは、やり遂げねばおかぬ自主的な人柄と、他面、広く人々に学んで自らをゆたかにしながら、人々と共に進む民主的な人となり、どちらも、この本の中でよくうかがへる。町民に学び町民と一緒にあゆむ丸谷町長によって書かれたこの本は、「丸谷金保著」であると同時に「池田町民著」とも言えてよいと思ふ。

池田町の詳しいことは、この本によって知っていただきたいが、以前から、北海道

一の池田町、北海道一の丸谷町長、いや、日本一だらうと評判はだんだん大きくなっている。日本には、ほかにも立派な町村や町村長が多いのであらうが、私は池田町の方々が、好評に驕ることなく精進して、ア

ジア一、世界一になってほしいと期待している。

(「内観録」507～8頁／「アジア文化会館と穂積五一」544～555頁)



穂積五一先生の追憶

丸谷金保

私はいまでも玄米食を実行している。今でもと言うのは、昨日今日に始まったことではなく戦中から玄米を食していたからである。今でこそ、自然食とか健康食とかハウザー食とか百花繚乱たる食事の是非が論じられているけれど、当時玄米食などというのは余程のことではなければ実行する人はいなかった。わずかに、明治大学の上にある佐藤生活館（現在の山の上ホテルの本館）が、東京で唯一の玄米食普及のレストランを持っていたくらいのものである。

当時、私は東大正門前にあった至軒寮で生活していた。この至軒寮は、1924（大正13）年、憲法学者の上杉慎吉先生が創立者だが、没後は穂積五一先生が寮長となら

れ、以降ずっと学生たちのめんどうを見ておられた。寮生は自炊生活をしながら人間の修練を積み、政治・思想を越えて心の深奥で結びついていた。寮にはアジア各地からの青年学生の往来も繁しく、戦後は「新星学寮」と改称、さらにアジアの青年たちの要望もあってアジア文化会館が生まれ、いまでは彼らも、日本の若者たちと起居を共にしながら研鑽に励んでいる。

私がここに生活していた昭和17（1942）年頃といえば太平洋戦争の真っ只中だが戦局はまだ日本に有利に展開していた。しかし、穂積先生はじめ寮内では、こんなバカな戦争をしていて勝てるはずはないと心配し、いろいろ手を尽していた。結局そのことで、先生や多くの先輩は戦時刑事特別法で投獄され、我々はボロボロな畳の部屋で玄米にたくあんシッポという毎日を送りながら、道場のような生活をしていた。この寮生活で私が出た最も大きなもの、それ

は、民族や国境に関係なく人間関係を大切にするという相互信頼の精神であり、これから書き綴ろうと思うよき師よき友を得たことである。

穂積五一先生はごく最近亡くなったが、現在の新星学寮は本郷の森川町にあって、先輩の浄財で古い下宿屋さんを買ったものであるが、昭和十年代のなかば頃そうしたお金が集まったのも、穂積先生の人徳である。先生が何故玄米食をするようになったか。穂積先生は豊橋在七郷村の生まれで、近県に島田一雄氏・岡田春夫氏らと共に“安保七人男”と言われた七郎さんがいる。七郎さんは七番目の男の子である。沢山の兄弟に囲まれて育ったことだけは間違いない。

豊橋中学から七高そして東大と、いわゆるエリートコースを進んだ穂積さんは、福田元総理とも大学の友人で、昔はよく行き来していた記憶を私も持っている。先生は負けず嫌いで、子供の時から相撲が強かったと言われながら病気がちで、若い時分に病気という病気をし尽くしている。その為、高等学校に入る前も、何年間かの闘病生活を送っている。そして、その闘病生活の中で、先生の言を借りれば、木や草や小鳥が自分と一つ物だという感覚を突如として得たということである。やんちゃでケンカ早くて頭が良くて、豊橋中学校の一年生の時は十何人抜きという手取り相撲でならした、いささか茶目っ気のある穂積少年が、高等学校受験を前に生き死にの間を徘徊し

て、突如として体で感じた宇宙との一体感、これが何であったかは私達には判らない。また先生もそれ以上のことは話しては下さらなかった。禅宗の坊さんがよく悟ったというそうした悟りにも近い己自身の心境の問題なのであろうと私は思う。

先生はそれから肉を食べなくなった。元来、三河の山奥で塩辛い魚の干物が何よりの御馳走だというから素直に菜食の世界へ入って行けたのだと思う。そして菜食主義で栄養のバランスをとってくれたのが玄米だと先生はいう。だから戦中の物が無かった時代、沢庵のしっぽがあれば、今日はすごいご馳走だと寮生が快哉を叫ぶ程の貧しい食卓であったけれど、玄米を食べていれば胡麻塩だけで1年や2年、からだはもつ。現に病に侵されながらも気力が満ち満ち、東条内閣と対決し、敗戦を予見して平和への模索を続けていた先生や、それを取り巻く先輩の教えの中からそれが読み取れる。今でもお付き合いをしている参議院自民党の金丸三郎さん、同じく山本富男さんは1977（昭和52）年に一緒に当選した同期の桜であるが、寮の関係でいうと金丸・丸谷・山本の順である。寮の出身者は正に百花繚乱、日本のあらゆる分野で活躍している。

人間関係一番大切

政界だけ眺めてみても、自民党から共産党まで幅広く、県知事や市町村長、常

時 20、30 人の僅かの学生よりいい寮としては驚くべき多岐にわたって人材が輩出している。穂積五一先生はいつも思想信条以前に人柄と人間関係が一番大切なこと、人と人の信頼関係を大事にすることを常に語っていた。

穂積先生が亡くなられた時、意を体して、御子息が内々の密葬だけで、葬儀らしいことをしなかったけれど、寮とその後、先生の最後の仕事になったアジア学生文化協会及び海外技術者研修協会の出身者が、バンコクをはじめアジア各地で穂積先生を偲ぶ盛大な催しを持ってくれたことで、その人柄は偲ばれると思う。日本の国内でも知る人ぞしるお人柄が、アジア各地に信者ともいえる多くの人々の信頼を得ていた、数少ない日本人の 1 人である。

私も明治大学の後輩で、寮で寝起きを共にした、朝鮮独立運動家を友に持っている。現に北朝鮮で然るべき役割を果しているときいているが、多くの国々の独立運動

に携わった人達が、寮に集まっていたものである。戦後、最も著名なこの寮の仕事としては、ベトナムから日本に留学し、反政府運動のかどで帰国を命ぜられた人達をも、寮生が中心になって学生に呼びかけまた一般に呼びかけ、寮で世話をし、学業を続けさせた一例である。その穂積先生が常に言っていた言葉、教科書問題を中心にしてこの頃、マスコミで多少出てくる意味よりは、はるかに厳しく、前の大戦で日本人が犯した過ちを、我々は何世代にもわたってアジアの人々に、心の中で詫び続けなければならないし、かつて植民地であった苦闘の歴史を考えない日本の善隣友好政策や海外援助事業が実を結ぶはずはなく、現在のような経済進出では必ず反発をかう、と深く憂えていた人でもある。

(『健康な家庭』『わが交友録 よき師よき友』1982年11月1日 健康な家庭社/「アジア文化会館と穂積五一」P544-548)

中国人留学生インタビュー

私達が日本を選んだ理由と今

<中央大学大学院 国際水環境理工学人材育成プログラム所属>

- 王 婭 (WANG YA) さん 修士2年 (四川省出身 北京師範大学卒)
- 童 宇超 (TONG YUCHAO) さん 修士2年 (広東省出身 四川大学卒)
- 劉 雨辰 (LIU YU CHEN) さん 修士1年 (江蘇省出身 河海大学卒)



(左から) 王さん、童さん、劉さん

—— 日本留学のきっかけを教えてください。

童 大学3年生の時に、学部を卒業したら海外の大学院に行きたいと思い、資料を準備してイギリスと台湾の大学院に申し込んだんです。その後4年生の時に中央大学の水環境プログラムの説明を聞いて興味を持ち、このプログラムにも申し込みました。結局、全ての大学院に合格することができたのですが、プログラムの内容や奨学金の額などから、中央大学のプログラムを選び

ました。

王 私も学部を卒業後は外国で勉強を続けたいと思っていて、4年生の時にスウェーデンの大学と中央大学に申し込み、両方に合格しました。スウェーデンは環境の分野では進んでいるということと、個人的にヨーロッパの雰囲気が好きだったので、中央大学のコースとどちらにするか迷ったので、私の先生に相談をしたんです。先生は私の専門分野である水環境に近い、洪水に関する研究の博士号を日本でとった方で



す。その先生が「日本の教育はすごく自信が持てる」と言うので、私は日本へ行くことを決めました。実は以前にも日本の大学への進学を考えたことはありましたが、日本語の基礎がないので、難しいかなと思っていたんですね。でもこのプログラムは最初の半年間、日本語を勉強できるので心配しなくてもいいかなと思ったんです。

劉 私は環境科学を学んでいた大学2年生の時から留学を考えていました。行き先としてはアメリカとかイギリスとか、英語圏の国を考えていました。でもこのプログラムの説明会に参加して、とてもいいのではないかなと思ったんです。日本に対する知識は大好きなアニメから得ていて、日本旅行に行きたいとは思っていましたが、日本語学科に進んだ友人から日本語はとても難しいと聞いていたので、留学までは考えていませんでした。

——— 今、みなさん日本語はどうですか？

王 今はだいたい大丈夫ですが、最初は大変でした。実はこのプログラムのパンフレットには「研究室では日本語と英語の両方を使っています」とあったので、それほど心配しなくてもいいかなと思っていたのですが、実際、普段の会話はほとんど日本語です(笑)。ただし、先生は時々英語を使って教えてくれますし、外国人の先生もいて、彼等は英語を使います。レポートなども全て日本語なのですが、最初の半年はやはり日本語力が足りなかったもので、先生は英語で書いてもいいよと言ってくれました。

童 私も最初は難しかったのですが、今は普通の会話は大丈夫です。

——— 来日後、イメージしていた日本や日本人と、違ったことはありますか？

王 日本に来る前は日本文化や日本の伝統についてはあまり知りませんでした。日本や日本人のイメージといえば、まず日本製品から受ける技術の素晴らしさ。それに日本のテレビドラマなどから、日本人は綺麗好きで優しいというイメージを持っていました。それはその通りだったのですが、違ったのは東京の印象で、東京は摩天楼というイメージが強かったのですが、実際はそれほどたくさんの高層ビルはありませんね。それからインターンシップを経験して、日本人の仕事に対する緻密さと責任感の強さというのも強く感じました。

童 私の日本人に対する来日前のイメージは、まじめで一生懸命に仕事をする人たち、



というものでした。そして実際に見た日本人もその通りでした。例えば今住んでいる寮の向かいにあるオフィスビルでは深夜2時、3時まで働いている会社員がいます。私がインターンシップをした会社の方も、よく残業をしています。それと同時に現場観測の準備でも、大小様々なケースを考えて、緻密に道具を準備します。こうしたところが日本が先進国である一つの理由なんだなと思いました。

—— 大学時代のお友達で留学をさせている人は多いですか？

王 大学時代は寮の7人部屋に住んでいたんですが、そのうち5人が外国の大学院の修士に進みました。2人がアメリカで2人がドイツ、私が日本です。アメリカに行った1人はもう卒業して、現地で就職をしました。卒業後は離れ離れですが、みんな中

国で何かあるとネットで自分の意見とか考え方とかを話して交流しています。外国にいるといろんな情報を受けることができ、中国にいた時より中国の状況が見えて、違った考え方を持つことができるんですね。その結果、学業終了後は帰国したい人もいるし、帰国したくない人もいます。

劉 私の高校生時代の友達は7割くらいが外国に留学しましたが、学部生の時の友達で留学したのは2-3人です。2人はアメリカに行っていますが、暇そうです（笑）

童 私は学部と同級生が90人いましたが、外国に進学したのはそのうち5-6人で、アメリカやカナダに行っていますが、あまり多くないですね。理由は私の専門である上下水道工学は就職がしやすいので、多くの学生はとりあえず就職という感じで、進学ことはあまり考えていなかったようです。

—— 日本留学に際して、今の日中関係は気にならなかったのですか？

王 私たちは2012年の10月に来日したのですが、その時は一番大変な時でしたね。

童 ただ私自身は大丈夫だと思っていました。

王 私も同じです。私の家族は今の時代は誰もが戦争をしたいとは思っていないので、そんな大変な事態には絶対にならないと信じています。それに私の大学には日本に留学をしたことがある先生がとても多くて、先生たちも日本人の評価がすごく高い

ですから。

童 私の両親はちょっと心配していましたが、私の考えは、今悪いのは政府間の関係で、民間人同士の関係ではないので、大丈夫だと思っていました。日本と中国が喧嘩のような状態になることは、昔から度々ありますから、特別大きな問題だとは思いませんでした。

劉 私はこの政治の問題は全然考えなかったです。家族も友達も何も言いませんでした。

—— 日本では中国の激しい反日デモの様子が度々報道されますが。

王 デモなどに参加する人はこの前のベトナムで起きた事件（反中デモ:2014年5月）と同じで、非常に少数の人たちです。普通の人たちはそういう危険な思想は持っていません。中国は収入の差が凄く大きいですから、お金持ちはすごくお金持ちで、そうでない人はすごく貧乏です。生活が大変な人たちはこうした機会があればそれを利用して心の中の不満をぶちまけたいのだと思います。だから実際はどんな理由でもいいんだと思います。

童 社会に不満のある人たちは、車を持っている人を成功したお金持ちだと思っていますから、自分はどうしてお金がないんだという気持ちを、車を壊すことで発散しているのだと思います。

劉 それに、中国は人口が凄く多いので、いろいろな人がいます。いろんな考えを持った人がいて、中にはそのような破壊行



為をする人もいますが、実際はとても少数の人たちです。私は南京に20年ほど住んでいましたが、そういう人は一度も見かけませんでした。

王 デモをする人たちの中には、もちろん本当に日中関係に関心が深い人もいますが、そういった人たちは暴力・破壊行為をする人とは違います。本当に日本に不満があるのなら、ものを壊すのではなくて発言で示すと思います。

童 私の同級生にも、このデモに関心がある人はあまりいませんでした。やはり普通に忙しい毎日を送っている人は、こういったことに関心を示す余裕はないと思います。

王 大学生はいろいろな教育を受けているので、事実を見て友達や先生と意見を交換して、この状況はどんな状況か、ほとんどが考えて話をしますが、普通の人、そういっ



た機会のない、特に昔の戦争を経験した高齢の人などで家でテレビだけを見ているような人の中には、これはたぶん日本が悪いから

皆は国のためにこうした行為をしているのだと思っている人もいます。他の人との交流が少ない人は、いろいろなことを考えて判断することが出来ませんから。

——— この政治問題で日本語学習者や日本留学希望者が減ることはあると思いますか？

劉 私は政治の影響はそれほど大きくないと思います。中国の大学には多数の日本語専攻科がありますが、学生が減っているという話は聞いていません。

王 私はそれはあると思います。私たちはもう大人で、自分で何が正しいのかを判断して行動することが出来ますが、子供たちは親の影響を受けますね。親によって、子供が受ける日本の印象は異なってくると思いますし、中には悪い印象を持って育つ子供もいると思います。また、私たちはいつも日本のアニメを見て育ち、日本に関する情報もいいものを受けています。これもいい、それもいい、何でもいいという感じですね。でももし今の厳しい政治の状況が

続いて、日本のアニメを見る機会が減っていったら、子供たちは私たちのように日本に來たいという希望は持たないと思います。

劉 でも私たちの世代が親になったら、子供にも正しい情報を教えられるんじゃないですか？ それに私自身、子供の時から学校の授業で日本に関する教育はありましたが、影響を受けたようには思いません。

王 そうですね。今、私たちが受ける情報はとても多様化していて、テレビや教科書よりもインターネットから得る情報の影響がずっと高くなっていると思います。もちろんネット上には様々な情報がありますが、最初はどれを信じればいいのかわかりませんが、いろいろな情報を見ていくうちに自分の考えがまとまり、最終的にどの情報が正しいのか判断できるようになる。私の周囲の人たちも私と同じ意見です。

童 私も自分の判断はとても大切だと思います。たくさんの情報をもとに自分で判断して、責任を持ってこの日中問題について考えるのは大切だと思います。いろいろな情報・・・間違っているものも、正しいものも全て見て聞いて、最後は周りに流されることなく、自分で判断して自分の責任で動けばいいと思います。

——— 他の国に行かずに日本に留学して良かったと思いますか。

童 私は良かったと思います。日本の大学の授業は発表の能力を重視するので、人の前で話す能力がとても高まったと思いま

す。学部生の時は、1人で発表するのはとても恥ずかしくて無理だったのですが、今は全然大丈夫です。

劉 私も日本に留学して良かったです。新しい生活、新しい人々、そして新しい景色と出会えたことは本当に良かったことです。勉強については今は特別な考えはありません。私は勉強がそんなに好きではありませんから（笑）。週末は秋葉原に行ったりして楽しんでいて、悩んでいる時はあまりありません。今はとても満足しています。

王 私も良かったと思っていますが、悩みもあります。中国の寮と違い、今の寮は1人部屋ですから生活の中に勉強しかありません。一部屋に何人かいるとみんなそれぞれ友達を誘って勉強以外のこともできるのですが、今は気軽にそういうことはできません。私の1日の日程は朝起きたら研究室に行き、夜遅くに帰りますから、悩み事があっても相談できる人はいません。なんとか自分で処理していますが、一人の時間が長いと寂しくもなりますね。

童 研究室にも中国人の友達はいますが、そこではプライベートな話はできません。それにもし王さんが恋人のことを相談したいのなら、私はあまり相談相手になれませんね（笑）

王 住んでいる場所というのは自分にとって優しい環境で、そういう環境でなら話せるけど、研究室ではなかなか話せないことも多いですね。週末も勉強で忙しいですから、どんなふうに自分の時間を使うかを考えることはすごく大切だと思います。以前

はあまりプライベートな時間について注意していませんでしたが、今はその時間を大切にしないと友達とだんだ

ん距離ができるように感じています。ですから最近は月曜から金曜の時間をもっと上手に利用するようにして、週末の時間は出来るだけ友達と過ごすようにしています。

——寮の部屋の話が出ましたが、最近ABK出身の香港の実業家の方が中国の大学に寄附をして、中国人と日本人が共に暮らす寮をつくったことが話題になりましたが、みなさんは日本人との交流についてどのように考えますか。

王 寮のことでは、より良く交流するのなら一部屋2人は少ないですね。中国人と日本人がお互いに一人ずつの場合、2人の性格が合わないと、うまくいなくなってしまいます。

劉 でももし4人にして2人ずつにすると、同じ国同士で話してばかりになるかもしれませんね。

王 たしかにそうですね（笑）

劉 私の場合日本人と交流するのは研究の問題について話す時だけです。他の機会はあまりありません。



王 私も今まで日本人と深く交流するチャンスはあまりありませんでした。やはり一緒に暮らしていたら、いろんなことについて交流できたんじゃないかなと思います。

童 私は研究室で一人の日本人とペアになって作業をしています。その人とは友達とっていいと思います。同じことを一緒にする時間が長ければ仲が良くなると思います。

王 そうですね。研究室でも小さいチームがあればみんなの仲は良くなりますね。私たちの研究室には外濠の水質を観測している小さいチームがあって、その小さいチームには中国人も日本人もベトナム人もいるので、その中での関係はすごくいいです。みんな一緒に時間をかけて同じことをやれば関係は良くなります。やはり一緒にいる時間が大切だと思います。

——— ではそのほか、日本の生活の問題点や楽しみを教えてください。

劉 問題点はやはり日本語です。今日午前中に初めて床屋に行ったのですが、日本語でどういうふうに説明すればいいのか、とても心配しました。楽しいのはアニメがたくさん見れることです（笑）。今一番嬉しい瞬間は大学の勉強を終えて寮の部屋に帰ることですね。家族と離れてちょっと寂しいですが毎日新しい出会いがありますから、大丈夫です。

童 私は来年の4月に就職しますが会社のことを心配しています。例えば自分の日本語能力は足りないと思っていますから、仕

事がうまくできるのか、それが心配です。会社と学校は全然違うところですから、外部の電話に対する対応の仕方など、ビジネス日本語は難しいですね。そこはちょっと心配しています。ただ、去年の9月に一か月この会社でインターンシップをしましたが、私の担当者や周りのスタッフはとても優しくいろいろ教えてくれました。

王 私も就職が決まっています、この前新入社員と内定学生の懇親会に出席しました。その時、新しい内定学生はたぶんほとんどが初対面でお互いを知らないなので、会話をするのがとても難しかったです。私も自分が何を話せばいいのかすごく悩んでしまいました。ですから、来年の4月が心配です。

童 生活の中で困ることはこの2年間なかったですし、今は生活にも慣れました。東京にいて素晴らしいと思うのは、凄く便利なところですね。特に電車は本当に便利です。行きたいところにはどこでも行けます。以前驚いたのは、神戸の学会に行く時、私たちは飛行機で行ったのですが、研究室の先輩は普通の電車を乗り継いで東京から神戸まで行ったんです。そこまで電車が網羅されているなんて、信じられません。

王 日本が非常に便利なのは、様々な情報がネット上に掲載されていて、外国人でも簡単に探すことができることです。例えば外国人がその国の交通情報を調べることはすごく大変ですが、日本の乗換え情報のアプリには、電車だけでなくバスへの乗継ぎ情報もきちんと表示され、外国人が見てもよくわかります。自分でチケットを予約す

ることもすごく簡単で、本当に分かりやすく出来ていると思います。

童 私は電機製品が好きなのですが、日本では新製品がすぐに発売されますね。そして、たぶん1〜2か月アルバイトをすれば、誰でもそういったものを買えます。中国ではそういうわけにはいきません。

王 そうですね。新しい商品は、メーカーが発表後、日本ではすぐに発売されますが、中国では発売が遅れることが多いですね。

—— 日本で就職をしようと思ったのはどうですか？

童 今の自分の日本語能力はまだ足りない状態ですから、日本の会社で経験を積み、自分の能力を高めて、いつか中国に帰って自分の会社を作りたいと思っています。

王 2年間の修士コースだけでは、日本語も日本の技術への取組みに関する勉強もまだまだ足りないと思いますので、日本企業で働いて、そういったものや日本人の仕事のやり方などを深く知りたいと思っています。また、内定をいただいている会社は特別アジアの事業に力を入れているので、私自身が将来開発途上国に行って日本の技術

で水環境の改善をする機会があればいいと思っています。

童 実は今王さんの話したことが、私たち

の「水環境理工学人材育成プログラム」の目的なんです。ベトナムやタイ、中国の学生を日本に集めて、日本の技術を勉強して、将来アジア人の卒業生たちがアジアの途上国で日本の技術を使い、水環境の問題を解決するということです。

劉 私は将来のことは、今はまだ決めてないのですが、先輩達のように今年のインターンシップの後、決められるのではないかとと思っています。

—— ぜひみなさんには日本と中国、そしてアジアの架け橋となって活躍していただければと思います。本日はありがとうございました。



国際水環境理工学人材育成プログラムとは

2009年10月に開催された第2回日中韓サミットを受け、2010年度に文部科学省が創設した、「日中韓等の大学間交流を通じた高度専門職業人育成事業（現「キャンパス・アジア」中核拠点支援事業）」として採択されたプログラムです。

留学生を含む大学院生を対象に、日本の産業界と行政の風土並びにその利点に習熟し、かつ国ごとの歴史、文化・風土を尊重する国際的視野をもった高度専門職業人としての水環境・水処理技術者を育成するためのユニークなカリキュラムを国内外の大学・研究機関等と協力して開発し、それを「国際水環境学コース」として実施するものです。

（中央大学ホームページより）

読者寄稿

山の巔、水の辺

— 雲南印象記 —

呉 騫（中国西南林業大学エコツーリズム学部）

程 希平（指導教師）



元阳梯田（元陽棚田）

通常、私達が考える季節のイメージは、「夏は暑い、冬は寒い」というものですが、中国の雲南ではこうした人々が持つ常識をひっくり返してしまうほど、夏と冬の姿は全く違います。ここでは同じ場所でも季節によって別の風景が見える、そしてこれほどまでに不思議な風景はまるで別世界のようでもあります。

さて、それではその不思議さを私とともに探していきましょう。

夏の景色

最初は夏です。ある町の夏は雲南で一番綺麗だと言っても過言ではありません。そこは麗江という町です。多くの民族が麗江

で暮らしていますが、中でも最も重要な民族は「ナシ」という民族です。ナシ族は、中国でも数少ない文字を持っている民族で、その文字は「トンバ」といい、彼らは今まだそのトンバを使い続けています。彼らは玉龍雪山を神として崇拝しています。玉龍雪山の海拔は5596メートルで、永遠に雪に覆われている広い雪山です。ロープウェーに乗って、4500メートル以上の氷河公園にも登れます。頂上は気温も低く、酸素も乏しいのですが、ここからの景色は素晴らしいの一言です。灰色の岩石、真っ白な雪、それに手を伸ばせば触れられるかのような空。他の場所では絶対に同じ感じは体験はできないでしょう。

ちなみに、暑さが苦手の人にとって、夏

でもまったく暑くないこの場所は、涼しい空気と独特の民族文化を満喫できる所です。

ルグ湖

玉龍雪山から300キロメートルぐらいの山道に沿って、湖が見えますが、その湖は「ルグ湖」と言い、この水辺で生きている人は、わずか4000人でその民族の名前は「モソ」です。モソ族ほどミス

テリアスな民族はありません。なぜかと言うと、彼らは今まで別の民族とは違い、独特な伝統を続けています。一体どのような風習があるか、自分の目で確かめてください。きっと彼らの生き方が羨ましくなるでしょう。時間の経過に伴い、ルグ湖の色は緑になったり、青くなったり、1日の間に



玉龙雪山（玉龍雪山）

様々な色に変化します。

夏は、湖に架けられた橋の周りは草の海になります。小さい舟に乗って進むと、まるでこの草海の中を泳いでいるように感じます。心も体も全身がリラックスできます。それに、この野菜と肉は全部野生のもので、食べてみると自然の匂いが口の中を包むようでとても幸せな気分になりました。



泸沽湖（ルグ湖）

冬の景色

夏の後には冬の景色を見てみましょう。今度は元陽棚田を紹介します。冬は休みの時であり、植物も動物も寝て、春を待ちます。普通、冬の景色は雪以外、退屈なものですが、この時の元陽棚田は一年



泸沽湖（ルグ湖）

棚田は一日の中で最高の見所で、日が昇った途端、暗い棚田には数々の色が現れ、陽の赤や雲のオレンジ、木々の緑など、無数の色が交わります。これは神のパレットで描いた絵に違いない。奥深く険阻な山の中にこんなに大きい棚田を作った農民の知恵と勤勉さには敬服せざるを得ません。

中で一番綺麗な姿を見せてくれます。秋で農作物を刈り入れ、来年の耕作の準備の為に、棚田に水を注ぎます。ここは撮影の聖地になります。ただ一枚の写真を撮る為に、毎年一千万人ものアマチュアとプロの写真家がここに来て、数か月滞在します。朝の

雲南は広くて、観光資源が豊かな場所で、ここで紹介した観光地は数多くの見所の中の一つです。まだ開発されていない美しい場所もたくさんあります。今よりもっと美しい景色と美味しい物が、みなさんを待っていることでしょう。

元陽梯田（元陽棚田）



バンコクの泰日工業大学で活躍するスタッフ&先生によるリレーエッセイ

泰日工業大学 (TNI) 奮闘記

⑥ タイ人と仏教

池田 隆

2014年5月2日金曜日、泰日工業大学教養学部主催で、タンブンが行われた。タンブンとは、簡単に言うと寺院や僧侶に喜捨を行い、徳を積むことである。今回は、大学の発展と、学生の学業成就を願い、ラーマ9世寺院という寺院から8名の僧侶を招いて、儀式が執り行われた。

タイの大学では年度の初めなどに、このような儀式を行うのが一般的である。しかし、教養学部では開学時に行われてから7年間1度も行われていなかった。

実は、今回のタンブンには、特別な事情がある。日本語を教えているタイ人教師2名が、突然病気に襲われた。両名とも30代半ばで、男性教師は脳内出血で倒れ、現在入院中であり、女性教師は原因不明の左腕のマヒという状況である。

このような不幸が立て続けに起きたため、御払いという意味が込められていた。

他の日本人教師は、「考えすぎなんじゃない?」と、偶然の出来事をそういう方向に結びつけて考えようとするタイ人の思考パターンを不思議がっていた。たしかに、単なる偶然なのかもしれない。

しかし、偶然ではなく、何かの祟りか悪霊の仕業という気がしないでもない。実は、以前教えていた大学で似たようなことがあった。筆者はそれを少々大袈裟ではあるが、「プラーラサダー事件」と呼んでいる。その内容はこうで

ある。

当時、筆者は3年生の観光日本語を担当していた。その授業の一環で、トラン県に1泊2日でガイド実習旅行をすることになった。

内容はトラン県の観光地5か所(1日目3か所、2日目2か所)を、学生のグループがガイド役となって説明し、それを教師と日本人ゲストが採点するというものである。参加者は日本人教師2名、タイ人教師4名、日本人ゲスト2名、3年生29名、大学のバス運転手1名である。

1日目にプラーラサダー博物館を見学したが、何事もなくその日のスケジュールは終了した。プラーラサダーとは、許心美という華僑で、19世紀末にトラン県知事を務めた人物である。彼はタイで最初にゴムの木を植えた人物であり、道路整備、教育の普及などにも尽力したため、地元では大変尊敬されている。

2日目になり、日程最後の鍾乳洞案内が終了するころ、もう一人の日本人教師が鍾乳石に頭



TNIにて



プラーヤーラッサダー博物館

をぶつけて出血した。急遽病院に行くことになり、数針縫った。

その後昼食をとり、帰路、トランを出発してしばらくしたところ、突然バスのエンジンの具合が悪くなって、近くのドライブインで停車した。1時間ほどで何とか走れるようになった。

しかし、トラン県からパッタルン県に抜けるルートは山道である。そこでもう一度動かなくなってしまった。運転手はタイヤの部分を覆っていたカバーを上にあげて車体下部を覗きこんでいた。体をバスの外にだしてから、バスの他の箇所をチェックしようとして歩いた時、タイヤのカバーにぶつかった。

数秒後、ポタポタポタと血が滴りだした。さっきの日本人教師と同じ部分を運転手も怪我したのだった。不吉な気配に、ざわつき出す学生達。彼の傷の応急手当てをして、対応策を話し合った。その結果、人数を減らせれば何とか峠を越えられるということなので、時々通過するロットゥー（乗合バン）と交渉して15名がロットゥーに乗ることになった。ロットゥーは夜8時過ぎ、バスは11時過ぎに帰りつくことができた。

2, 3日後、タイ人教師から「みんなでお寺に行きます。」と言われた。教師の説明によると、学生の一人が、夢にプラーヤーラッサダーが出てきて、とても怒っていると言ったそうである。博物館を見学する際にとてもうる

さかったこと、座ってはいけな椅子に誰かが座っていたこと等が原因だそうである。

よく分からないが、恐らく、筆者が考えるに、プラーヤーラッサダーは博物館（元は彼の邸）で侮辱的な行為をされたと感じていたのだと思われる。

夢を見た学生は、信仰心が篤く、とうてい嘘を言うようなタイプでは無く、また、彼女がトラン県出身であることから、誰もが十分納得していた。

懇意にしている寺院に行き、そこでタンブンを行った。儀式が終わると、みんな心晴れ晴れ、安心そのものといった表情であった。もちろん、その後は何も起こってはいない。

さすがお坊さん、長年修業してあるだけのことはある。やはり心の拠り所としての仏教の威信は絶大である。タイの生活は仏教に関わりのあることが非常に多く、人々の行動の中に信仰心の深さが表れている。TNIの敷地にも小さな祠と仏像があり、朝、学生がその前を通り過ぎる際にワイ（合掌）をするのをよく見かける。とても美しい光景である。

そのようなことが自然にできるタイの人々が本当に羨ましいと思う。

池田隆（いけだたかし） 泰日工業大学（TNI）教養学部日本語講師。2003年青年海外協力隊員として、タイ国ウボンラチャタニ大学に赴任。その後、タイ南部タクシン大学を経て、現職。



奨学金情報

こうえきざいだんほうじん さとうようこくさいしょうがくざいだん しひりゅうがくせいしょうがくせい
■ 公益財団法人 佐藤陽国際奨学財団 私費留学奨学生

●対象：①バングラデシュ、ブータン、ブルネイ、カンボジア、インド、インドネシア、ラオス、マレーシア、モルディブ、ミャンマー、ネパール、パキスタン、フィリピン、シンガポール、スリランカ、タイ、東ティモール、ベトナムから来日し、文部科学省所轄の大学の学部または大学院に在籍する当該国の国籍を有する私費留学生

②国際理解と親善に関心を持ち、財団の交流会に必ず出席できる者

③他の奨学支援団体等から奨学金に類する金品を受給していない者（研究助成金などを受給している場合は事前に事務局に問い合わせること。貸与奨学金については応募可）④在留資格「留学：college student」を有する者

⑤日本で就業している親がいない者

⑥「博士」の学位を取得していない者

⑦課程の修学期間が奨学金支給開始時期より1年以上ある者

⑧勉強・研究に支障のない日本語能力を有する者

⑨当財団の奨学生を終了後、同窓生として交流活動に積極的に協力できる者

●給付金額：（学部学生）月額12万円、（大学院生）月額18万円（他に学会出席補助金制度あり）

●給付期間：①2014年10月から2016年9月までの2年間 ②2015年4月から2017年3月までの2年間（ただし、採用時の課程修了までの標準修業年限とする。）

●募集人数：約15名

●応募方法：在籍する大学の留学生課を窓口として、応募書類を募集期間内に留学生課から当財団宛に郵送にて提出すること。

●募集期間：8月25日（月）～8月29日（金）※ただし、2014年10月及び2015年4月入学の新1年生・新編入生に限り9月17日（水）まで受け付けます。

●団体連絡先：〒153-0064 東京都目黒区下目黒1-7-1 公益財団法人佐藤陽国際奨学財団事務局

☎03-5487-2775 URL <http://www.sisf.or.jp>

 お便り

小田中聡樹（元当財団理事、東北大学名誉教授）

< 2014/4/19 >

『田井さんの思い出』拝受しました。一挙に新星学寮時代に戻ったような懐かしさにしばし、呆然としました。本当に新星学寮は、物を考え、将来を考え、読書に親しみ、友人と語らう青春の日々だったと改めて考え胸が一杯になりました。小木曾君はお元気ですか。私も比較的元気にくらしています。時折短文を書いたりしてくらしています。その中の一文を同封し御笑覧に供します。ではお元気で一。

< 2014/5/22 >

さて、アジアの友4・5月号を拝見しました。充実した内容で、今日本は対米一辺倒を抜け出してアジアとの友好関係を築くことが大切であることをしみじみと感じました。とくに12頁の小木曾君の言には共鳴するものがありました。私もささやかながら一書を刊行しましたので御笑覧下されば幸いです。（『国防保安法の歴史的考察と特定秘密保護法の現代的意義』（小田中聡樹著 東北大学出版会）

MEMBERS

〈会費とご寄付の報告〉

2014年4月

特別会員

(1口)

梁谷 公久 坂東市

正会員

(3口)

西谷 隆義 土浦市

(2口)

柳瀬 修三 タイ
林 均 横浜市

(1口)

坪井 健 横浜市
松本 誠一 文京区
鈴木 智 日立市
東京都太田記念館 杉並区
真弓 忠 渋谷区

国士舘大学国際交流センター

世田谷区

坂詰 貴司 船橋市

今泉 雅勝 墨田区

高 秉沢／姜英園 横浜市

二村 美朝子 練馬区

大野 大平 北区

横田 雅弘 千代田区

染谷 誠 越谷市

小嶋 秋彦 草加市

愛知淑徳大学国際交流センター

長久手市

椋山女学園大学国際交流セン

ター 名古屋市

ご寄附

増田 澄 文京区

照井 文隆 市川市

近藤 清子 秩父市

松浦 秀嗣 国分寺市

2014年5月

正会員

(3口)

加倉井 弘行 豊島区

(1口)

赤星 裕 船橋市

千野 克子 墨田区

高橋 作太郎 静岡市

関 正昭 鹿児島市

堀 幸夫 杉並区

劉 開順 渋谷区

岩尾 明 日田市

木村 博／劉 彩品 川崎市

ご寄附

高橋 作太郎 静岡市

増岡 信男 流山市

劉 開順 渋谷区

皆様の暖かい御支援に感謝申し上げます

ご入会とご寄付のお願い

当協会は、政府の補助金を受けていない純民間運営の公益法人です。財源に限りがあり、皆様方からお送りいただく会費、寄付金は、本協会の活動を支える貴重な財源となっています。何卒ご理解、ご協力をお願い致します。

協会のあらまし

名 称：公益財団法人アジア学生文化協会
ASIAN STUDENTS CULTURAL ASSOCIATION
(ASCA)

所在地：東京都文京区本駒込2丁目12番地13号

代表者：理事長 小木曾 友

設 立：1957年（昭和32年）9月18日
故穂積五一氏創設

目 的：日本とアジア諸国の青年学生が共同生活を通じて、人間的和合と学術、文化および経済の交流をはかることにより、アジアの親善と世界の平和に貢献することを目的とする。

◇主な事業◇

- (1) 留学生宿舍の運営
- (2) 留学生日本語コースの運営（進学希望者向けの日本語を中心とする教育）
- (3) 留学生に対する情報提供支援
- (4) アジア語学セミナー
- (5) 帰国留学生のアジア文化会館同窓会、(社)日・タイ経済協力協会、ABK留学生友の会との連携・協力

◇会費（年額）◇

正会員 1口 1万円
賛助会員 1口 5万円
特別会員 1口 10万円

会員には広報誌「アジアの友」が無料配布されます。また、広報誌購入だけを希望される方には、購読料年間3千円（学生2千円）でお送りしています。

当財団に対する寄附金は、所得税、一部自治体の個人住民税、相続税、及び法人税の税制上の優遇措置があります。

本誌で広告してみませんか。

団体・企業を問わず、編集部へご相談ください。

おかげさまで、当財団は2014年4月1日に公益財団法人に移行しました。これまでご支援いただきました皆様には大変ご迷惑をおかけしておりましたが、これにより会費並びに寄附金は税制上の優遇措置の対象となります。今後とも、皆様のご支援の下、これまでと同様留学生宿舍の運営、留学生への情報提供、同窓会活動等の活動を通じ、アジアの青年の育成と友好親善のために微力を尽くす所存です。引き続き皆様のご支援を賜りたくよろしくお願い申し上げます。

後 記

100年ぶりの公益法人制度改革は、2008年12月1日に施行された新たな法律に基づき開始され、当協会は学校法人設立と同時に進行で新法人移行への手続きを進め、2014年4月1日に公益財団法人へ移行しました。この間、お世話になりました関係者の皆様方には心からお礼を申し上げます。（F）

当誌で、度々その活動を取り上げ報告してきたABK第1期生の香港の曹其鐘さんが、中日の近年の関係を憂慮し、ABKでの生活体験をヒントにして、中日の青年にその将来を託そうと中国の中核5大学に各約3.2億円を寄付して「中日青年交流センター」建設を始めた話を伝えてきたが、更にその活動は展開され、私財約102億円を投じて中日をベースにした将来のアジアを担う優秀な青年を育成するための奨学金を創設した。そこで、本号では曹さんの活動の軌跡を特集した。（F）

（お詫びと訂正）

本誌第508号に以下の誤りがありました。お詫びして訂正をさせていただきます。

7頁右段13行目と14行目（誤）佐伯外務次官 →（正）齋木外務次官

9頁左段16行目（誤）新聞社 →（正）新聞

アジアの友 2014年6・7月号

2014年6月20日発行（通判第509号）

年間購読（送料共）3,000円（学生2,000円） 1部 500円（税込）

発行人 小木曾 友

編集 アジアの友編集部

発行所 公益財団法人 アジア学生文化協会

東京都文京区本駒込2-12-13（☎113-8642）

電話番号：03-3946-4121 ファクシミリ：03-3946-7599

振替口座：00150-0-56754 E-mail：tomo@abk.or.jp

ホームページ：(<http://www.abk.or.jp/>)

published by ASIAN STUDENTS CULTURAL ASSOCIATION
(ASIA BUNKA KAIKAN)

2-12-13, Honkomagome, Bunkyo-ku, Tokyo, 113-8642, JAPAN

☎+81-3-3946-4121 ☎+81-3-3946-7599

Email：tomo@abk.or.jp

Home Page：(<http://www.abk.or.jp/>)

「アジアの友」の購読会員（年3,000円・学生2,000）にご入会下さい。振替用紙又は電話等にて。



学校法人 ABK 学館

ABK学館日本語学校

所在地 〒113-0021 東京都文京区本駒込 2-12-12

電話番号 +81-3-6912-0756

FAX +81-3-6912-0757

URL www.abk.ac.jp

E-mail info@abk.ac.jp

2014年4月新規開校



ABK
COLLEGE

2013年4月に完成した新校舎

新築3階建校舎。最新の耐震設計です。



- 留学生の絆が作る日本語学校 -

ABK学館日本語学校(英語名称: ABK COLLEGE)は1957年に設立された(公財)アジア学生文化協会が寮生活や日本語を学習した留学生、そして多くの関係者のご寄付と献身的な協力により、学校法人による日本語学校として2014年4月に開校します。当校には姉妹校のABK日本語コース(公財)アジア学生文化協会)もあり各種協力を行います。



授業風景イメージ



寮の一例



ABK日本語コース

ABK COLLEGE

ABK COLLEGE (学校法人ABK学館 ABK学館日本語学校)

東京都認可日本語課程(大学院・専門学校・就職・文化体験等)

4月 1年コース	860時間/1年	入学校定料	20,000円
		入学金	80,000円
		授業料(施設・教材費含む)	620,000円

姉妹校 ABK日本語コース(公益財団法人アジア学生文化協会)

文部科学省指定大学進学準備教育課程

4月 1年コース	1086時間/1年	入学校定料	20,000円
		入学金	大学進学 日本語課程 80,000円 大学進学 準備課程 95,000円
		授業料 (施設・教材費含む)	720,000円(1年) 1,080,000円(1.5年)

所在地: 〒113-8642 東京都文京区本駒込 2-12-13
電話: +81-3-3946-2171 FAX: +81-3946-7599

URL: http://abk.or.jp
E-mail: nihonjgo@abk.or.jp



◎ 国語教育の中心地
東京の中心部にありながら、
緑が多く静かな環境